



江戸川クリーン大作戦では、河川敷や堤防のゴミや不法投棄物を回収する。中には自転車などもある

問われる 利用者のマナー キモチいい江戸川へ

利用者が増え、利用形態が多様化する中で、利用者のモラルやマナーの低下が目立ってきた。中には重大な事故につながるかねない危険な事例も報告されている。河川は原則的に誰でも自由に利用することができる。だからこそ、利用者のマナーやモラルが厳しく問われるのだ。

一方で、江戸川流域では川の環境を守る取り組みも盛ん。江戸川クリーン大作戦は30年も続く取り組みで、毎年春に実施され、流域の住民や団体など約1万人以上が参加する。

利用者が互いに気遣うことで、江戸川はもっと安全・安心で、快適に利用できるようになる。私たち自身の意識をさらに高めて、にぎわいがある「キモチいい」江戸川を目指したい。

ひとインタビュー

江戸川で育んだプロへの夢
埼玉西武ライオンズ 春日部市出身

プロ野球選手
斉藤彰吾さん



実家は江戸川のすぐ近くです。小学校低学年の頃は、河川敷でよく試合をしましたし、子どもたちにとって格好の遊び場でした。

プロ野球選手になりたいと思ったのは、小学4年生の頃。少年野球チーム「桜川ジャガーズ」に入団して直ぐでした。テレビで観るプロ野球選手がカッコ良くて、憧れてました。冬の河川敷はすごく寒かったでしょうが、とにかく一生懸命だったから寒さなんて気にしなかったなあ。そういう意味では、江戸川でプロの夢を育んだと言えますね。

大人をみる子どもの目

チーム練習がなくても普段から兄と一緒に江戸川で練習してましたし、友だちとの遊びも野球でしたね。「江戸グラ、行こうぜ」。河川敷のグラウンドで野球をやろうという意味です。当時の仲間たちはこれで分かって合っていました。

今も実家に帰れば、犬と一緒に堤防を散歩します。ゴルフ練習する人や散らかったゴミをみると気になります。江戸川は子どもたちが夢を育む場ですから、少しでも良い環境であってほしい。子どもたちの目が私たち大人を見ていることを忘れないでください。

1989年生まれ。春日部市出身。春日部共栄高校時代、2005年夏の甲子園に出場するなど中軸として活躍した。07年プロ野球ドラフト会議で、埼玉西武ライオンズから指名され入団。攻走守揃った外野手として期待され、2010年から1軍に定着している。

暮らしを支える江戸川の役割

広々とした河川敷や水辺は都市部に残された貴重な空間で、大勢に利用されている。国土交通省が平成18年度に行った調査では、江戸川・利根運河の年間利用者数は推計で約102.5万人、中川・綾瀬川・三郷放水路は約18.9万人に上る。



春日部市にある庄和浄水場。江戸川の水を約110万人へ給水する（写真提供：埼玉県）

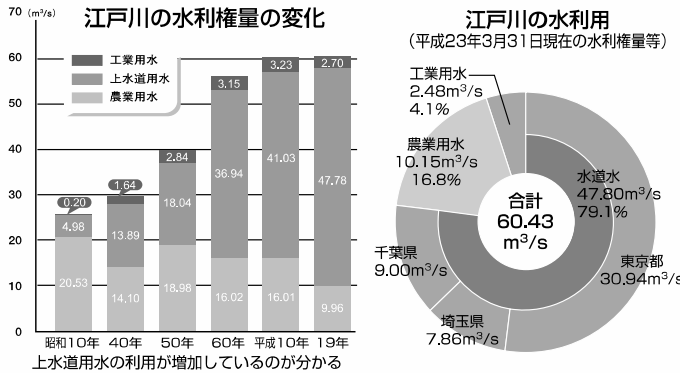
日本の年平均降水量は1700ミリ。関東地方は1500ミリで、全国平均の90％に満たない。しかも、4100万人が暮らす関東地方では、1人当たりが使える水の量は全国平均の約26％という状況である。

さらに、日本の降水量は梅雨期や台風期に集中している上、河川上流で降った雨が一気に流れ出す。河川の流量が大きく変動し、濁水や洪水が起こりやすい。

蛇口とつながる川。国土交通省江戸川河川事務所は、暮らしの水を守る取り組みを積極的に進めている。その一方、家庭でできることも多い。残飯や揚げ油を適正に処理したり、分解しやすい石けんを使ったりするなど、排水口と江戸川がつながっていることを理解することが大事だ。

暮らしを支える命の川

江戸川の水は、私たちの家庭だけでなく農業や工業など多くの用途に使われている。グラフをみると、江戸川の水利用の約8割は飲み水（上水）に使われており、その利用は年々増加しているのが分かる。国は水量・水質の管理や江戸川水閘門などの施設の操作を行い、流域の水利用を支えている。



～中川の環境保全の取り組み「ノウルシの移植」～

江戸川河川事務所では、河川環境保全の取り組みとして、中川でノウルシの移植を行いました。ノウルシは、湿地に生える多年草で、国のレッドリストで準絶滅危惧種、埼玉県では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている希少な植物です。堤防工事に先立ち、中川の環境調査を実施したところ、八潮市区間でノウルシ群落が発見されたため、平成23年9月、工事の影響を受けない上流の河川敷へ移植を行いました。移植にあたっては、専門家にも意見を頂きながら、土壌などノウルシの生育環境を調査するとともに、移植先の現地確認などを行いました。



ノウルシ（トウダイグサ科）



移植前の現地確認

1000万人の暮らしを支える水 蛇口とつながる江戸川

江戸川は茨城県五霞町付近で利根川と分かれ、埼玉、茨城、千葉、東京の境を南下して東京湾へ注ぐ。かつて人の手によって台地を削り作られた江戸川は、暮らしと深く結びついた川だ。首都圏内1000万人の飲み水を供給し、工業と農業を支える。また、広々とした河川敷や水辺は都市部に残された貴重な空間で、多くの人が利用する。

これらの水源は利根川の上流などにあるダム群で、約60％がダムによって開発されたもの。上流ダム群はダムの特長、流域の雨量や利用状況などに応じて計画的に組織的に運用されており、江戸川の水は「統合管理」によって安定的に供給されている。

家庭の排水口は江戸川の水源

「川の汚れの80％が家庭の排水が原因」とも言われている。汚れた水は排水口に流しても消えることはなく、下水処理場や浄化槽に負担をかけ、川の水質悪化につながる。暮らしの中で川を意識し、家庭も水源であることを理解して、水の使い方や排水の仕方にも工夫しよう。



洗剤を使わない「アクリルたわし」の利用を進める取り組みもある

